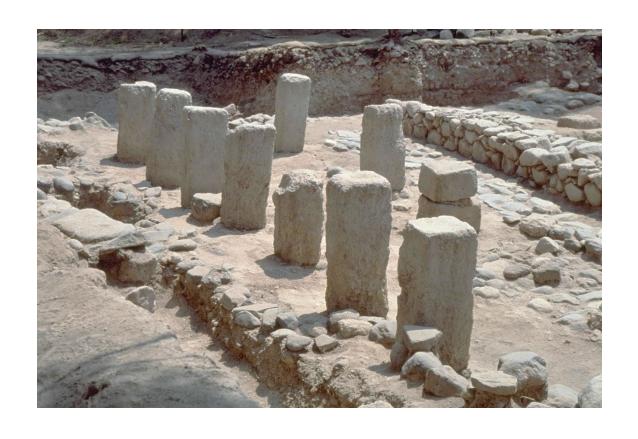
西アジア考古学最前線 トップランナーズ&パイオニアセミナー



2022.11.12

主催:日本西アジア考古学会

後援:公益財団法人 古代オリエント博物館

池袋サンシャインシティ文化会館ビル5階(オンライン同時開催)

表紙写真:エン・ゲヴ列柱式建造物 (鉄器時代 IIB) (提供 月本昭男)

プログラム

- 10:00 開催挨拶
- 10:15 トップランナーズセミナー① 「植物考古学からアジア史を描いてみると」 赤司千恵(帝京大学)
- 11:30 昼食休憩
- 12:30 トップランナーズセミナー② 「それでも君は西アジア考古学者をめざすか? 西アジア考古学における 歴史時代研究とフィールド調査」 西山伸一(中部大学)
- 13:45 休憩
- 14:00 パイオニアセミナー
 「テル・ゼロールからテル・レヘシュへ
 ―日本調査団によるイスラエル遺跡発掘調査と
 その意義」

月本昭男(古代オリエント博物館)

- 15:50 懇談会(会場参加のみ)
- 17:00 終了

植物考古学からアジア史を描いてみると

赤司千恵帝京大学文化財研究所

1. 植物考古学とは

植物考古学というのは、遺跡から出てくる植物の遺体を分析し、当時食べられていたもの、 栽培されていたもの、薬としていたもの、燃料としていたもの、家の建材、農具の材料など を調べる、考古学の一分野です。

植物は有機物なので、普通なら地中では腐ってしまいますが、火を受けて炭になったり、水漬け状態になったり、極度の乾燥状態に置かれると、微生物に分解されることなく遺跡から出土します。日本では低湿地の遺跡も多く、例えば福井県の鳥浜貝塚では、大量の木製品が水漬けの非常によい状態で出土しています。また新彊やエジプトの遺跡では、乾燥のためにあらゆる植物がそのまま残ります。しかし西アジアの場合は、冬は意外に雨が多く、低湿地の遺跡もほとんどないので、炭化した植物が分析対象となります。

西アジアでの植物考古学は当初、農耕の起源を解明するために発達してきました。西アジアは世界で最も早く食料生産が始まった地域で、コムギやオオムギ、レンズマメなどが、この地で栽培化されました。そのため、西アジアでの農耕の起源を明らかにすることは、人類史にとって非常に重要です。しかし近年の科学的な発掘調査では、時代にかかわらず、どの遺跡でも植物や動物の分析が行われるのがスタンダードになっていて、植物利用からみた西アジアの歴史をたどることができるようになってきました。そこでこの発表では、遺跡から出土する植物から、西アジアの歴史をたどってみたいと思います。

2. 西アジアの食文化史

現代の西アジアでは、コムギのパン、ヒョコマメのペースト、トマトと卵の炒めもの、オリーブの塩漬け、お米のピラフ、ピスタチオのパイ菓子などが食べられています。この中には、西アジアで農耕開始とともに栽培化された植物、農耕が始まってしばらくしてから栽培化された植物、西アジアの外から伝わった植物など、いろいろなルーツを持つ植物が含まれています。

しかし、今のような食卓が完成するまでには、単純に食用植物の種類がだんだん増えていったというわけではありません。実は西アジアで最初に栽培化された植物の中には、今はも

うほとんど栽培されていない植物もあります。かつては人の主食だったのに、今ではもっぱら飼料として栽培される植物もあります。ずっと食べられてきたのに、結局栽培化されないままの植物もあります。日本の食文化史をみても、一般の人がみんな米を食べるようになったのは比較的最近であるように、実は食用植物は時代によって大きく変わってきています。

たとえば、最初に栽培化されたコムギは、アインコルンコムギやエンマーコムギなど、皮性コムギというタイプのコムギでした。しかし、現在私たちが食べているのは、パンコムギなどの裸性コムギというタイプのコムギです。裸性コムギは簡単に殻から種子を取り出すことができるのですが、皮性コムギは固い殻に覆われているために脱穀ともみすり作業が必要で、食べるまでに労力がかかります。今では皮性コムギは、西アジアやヨーロッパの一部地域で細々と栽培されるのみです。オオムギもコムギと同時期に栽培化された植物で、主食の一つでした。青銅器時代になるとオオムギしか出土しない遺跡もあるほどですが、今では人の食料になることは稀です。

次に果樹類をみてみると、西アジアの果樹として多くの人がまず思い浮かべるのは、ブドウやオリーブ、ナツメヤシではないかと思います。しかし、これらの果樹類が一般的になるのは青銅器時代以降のことで、それまでは野生のピスタチオやサンザシ、エノキの実、イチジクが主な食用の果樹類でした。そのうちイチジク以外の果樹は、利用の歴史が非常に長いにも関わらず、結局栽培化はされないまま、今でも(半)野生の状態で生えています。青銅器時代以降に果樹栽培が広まると、ワインやオリーブオイルなどの加工品が、重要な保存食料、交易品になっていきます。

最近は、これらの植物をどうやって食べていたかという、調理法の研究が盛んです。現在の西アジアではコムギを主にパンとして食べています。しかし遺跡から出土する調理した穀類の塊の分析によると、ポリッジとして食べることもあったようです。パンとポリッジ以外にも、現在の西アジアには、パスタ、ブルゴル(挽割りコムギ)、フリッケ(まだ若い緑色のコムギをあぶったもの)など、コムギの食べ方がたくさんありますが、このようなコムギ食の文化がどうやって成立したのか、今後の研究で分かるかもしれません。

3. そのほかの植物利用

食用以外にも、植物は生活のさまざまな場面で利用されています。たとえば燃料は、日々の調理や暖房に欠かせません。炭化した材を調べると、なんの木を薪にしていたかが分かりますし、これらの薪として使われる木は遺跡のごく近くに生えていたと思われるので、遺跡近郊の植生復元にもつながります。また、現在の西アジアのような乾燥地帯では、家畜の糞が燃料に使われていますが、遺跡からも焼けたヤギやヒツジの糞石が出土することがあり

ます。この糞石には動物が食べた植物の種子が入っているので、動物に与えていた飼料や牧草を知ることもできます。

薬としての植物は、古くはネアンデルタール人も利用していたとされており、現在でも西アジアの各地に伝統的な薬用植物利用や採集の文化が残っています。しかし、薬用だった植物を考古資料から見分けるのは非常に困難です。出土する植物の中には、薬効を持つ種類はたくさんあるのですが、食用だったかもしれないし、燃料だったかもしれないし、ただの雑草だったかもしれないからです。それに、薬用の植物は量を必要とはしませんから、出土したとしても少数でしょう。それでも、薬は簡単に代替が見つかるものではないので、薬用植物は替えが利かない重要性を持っていた可能性があります。

雑草と思われる植物も出てきますが、これも重要な研究資料です。貯蔵された穀類やマメ 類が、火事で偶然焼けるなどして、まとまって見つかることがあります。この貯蔵作物の中 に混じっているのが、畑に生えていた雑草です。雑草の種類からは、当時の畑の水分環境な どを推定することができます。

4. 植物考古学のすすめ

土器や骨の場合は、専門家であれば、出土した時点で時期や動物種をある程度判別できます。しかし、どんな植物が出土しているのかは、現場ではなかなか分かりません。土壌に混じった種子を肉眼で探して、さらに同定までするのはいくら専門家でも難しいです。そのため出土植物を研究するには、土壌サンプリング、フローテーション、ソーティングという、いくつかの工程が必要になります。地道な作業ではありますが、あ、オオムギだ、あ、イネもあった、などと、時間を忘れてしまうような一番楽しい作業でもあります。この楽しさを共有させてくれる人が、少しでもたくさん現れることを願っています。









それでも君は西アジア考古学者をめざすか?

西アジア考古学における歴史時代研究とフィールド調査

西山伸一 中部大学

はじめに

学会からの説明によれば、このトップランナーズ・セミナーは研究の最前線に立つ研究者が、西アジア考古学の魅力を生徒・学生(中学生から大学生)を含む若い世代に伝え、ひいては西アジア考古学に興味関心を抱いてもらう趣旨だそうです。

今回の私のお話は「それでも君は西アジア考古学者をめざすのか?」という少々挑戦的な題目がつけてあります。その意図をまずは説明しておきましょう。私の話では、まず現在の日本における西アジア考古学という学問がかかえる様々な課題に思いを巡らしたく思います。これは、次世代を担う人々にこの学問が抱える課題を認識してもらい、それらをどうすれば解決または改善できるか考えてほしいという願いがあるからです。そして、新たな日本の西アジア考古学を作り上げてほしいというささやかな(壮大な?)願望があります。もちろん、これは一朝一夕にできるものではないかもしれません。ただ日本の西アジア考古学がかかえる課題を振り返ってみることは、研究者人生の後半(終盤?)に入った私としてはある意味責務とも感じているからです。もちろん私より年長のみなさんの中には「なにを若輩ものが!」と思われる人もいらっしゃるかと思います。しかし、日本の西アジア考古学をさらに発展させたい気持ちは同じです。このお話が将来、西アジア考古学者を目指す人たちのなにかしらの参考になればと願っています。

もちろん、これだけではなく最後には自分の研究の成り立ちやその方向性についてもお話します。どんな研究者もその時代背景やタイミング、出会う人たち(先生、先輩、友人、後輩など)によってさまざまな研究人生を送るため、私の事例は参考にならないかもしれません。それでも少しでも参考になればとの思いから、私の研究に関する魅力についてお話したいと思います。

本題に入る前に、2つの用語について定義しておきましょう。まず、「歴史時代」ですが、ここでは文字資料(史料)が登場してから近代までを指します。つまり銅石器時代末期(前4千年紀末)あるいは前期青銅器時代(前3千年紀)からイスラーム時代までをこう呼ぶことにします。また「西アジア」は、エジプトを除くレヴァント地方(東地中海沿岸部)からアフガニスタンまでを含むこととします。日本西アジア考古学会には、西アジアだけでなく、エジプト・スーダンから南アジア、中央アジアまでを含む幅広い地域を対象とする研究者が入会し活躍していますが、ここでは西アジアを狭義の意味でとらえて使用します。

1. 歴史時代研究の少なさ

日本の西アジア考古学には諸外国(主に欧米諸国)と比較するといくつかの特徴があります。その一つは、先史時代の研究者が圧倒的に多いということです。もちろん歴史時代を対象とする研究もこれまで盛んにおこなわれてきましたし、日本における西アジア考古学の黎明期(1950~1970年代前半)には、歴史時代を対象とした調査も数多く行われてきました。しかし、1980年代以降、日本の西アジア考古学は西アジア各地にフィールドを拡大していた時期には、多くの先史時代を対象とする調査が進行し、それにともない若手もどんどん育ってきました。結果、1960年代以降に生まれた研究者で歴史時代を研究対象とする研究者は先史時代の研究者と比べると格段に少なくなったといえます。その要因はどこにあるのだろうかと考えてみると、日本の西アジア考古学の黎明期にあったと思われるのです。

2. 日本で西アジア考古学を研究する意義

西アジアと比較するとエジプトを対象とするエジプト学やエジプト考古学は1980年代後半以降、現在に至るまで隆盛を維持しているように見えます。西アジアの歴史時代を対象としている私から見ると同じような時代なのだけどエジプトの方が圧倒的にマスコミへの露出や展覧会の数が多いと感じます。「日本人はエジプトが好きなのです」と言ってしまえばそれで終わりですが、西アジアは魅力がないのだろうか?それともアピールする努力が足りないのだろうか?この点については、研究者が日本で西アジア考古学を研究する意義をきちんと考え、それを基盤に一般の人たちに西アジアをアピールしてゆくことが重要であると考えます。日本西アジア考古学会の黎明期であった時期に、ニュースレター『日本西アジア考古学会通信』第4号(1998年8月)で東京大学名誉教授の藤本強先生(1936-2010)は、日本において西アジア考古学を研究する意味を考えておく必要が大切であると述べています。日本から一番遠いアジアの地域をなぜ研究するのか、それは現代社会に生きる私たちとどのような関係があるのか。先生日く「多くの人々の支持なしには学問は成り立たない」という言葉がいまでも重く響きます。

3. 日本と欧米の西アジア考古学の比較

西アジア考古学研究の意義を見つめた後、西アジア考古学の先進地である欧米諸国との 比較を試みます。このことにより日本に何が足りないか、あるいは逆に日本をベースに研究 することにどのような有利な点があるのか考えてみます。欧米と日本のそれぞれの長所短 所を長年フィールドから見つめてきた者として、日本が改善すべきところを提言してみた いと思います。特に歴史時代の研究は、欧米の方が100年ほど先に研究を開始したという歴 史的事実があります。それにともなって資料や施設の面で日本とは大きな差があるのも事 実です。それにどう対峙してゆくのかもお話できればと思います。

4. フィールド調査の重要性

考古学はフィールド調査が欠かせません。かといってフィールド調査がすべてでもありません。近年では急速に進むデジタル化技術の進歩により「現場」での考古学者の役割とはなんだろうかということを考えることがあります。また同時に専門が細分化し、分野間の連携がなかなか難しくなっているのも事実です。と同時に資金獲得には学際的研究はかかせません。さらに近年では文化遺産保護や現地に成果を還元する視点も欠かせなくなっています。日本の西アジア考古学のフィールド調査の変遷を振り返るとともに、私の経験してきた歴史時代のフィールド調査の実際をお話し、歴史時代を発掘調査する魅力をお伝えできればと思います。

5. 私の研究の成り立ちと方向性

最後に私の研究の成り立ちと方向性についてお話しておきましょう。私はこれまでレヴァント地方からメソポタミアを経由してイラン西部に至る地域の鉄器時代(紀元前 1200-550年)の物質文化に関するさまざまな事象を研究してきました。現在は、イラク共和国クルディスタン地域とレバノン共和国でのフィールド調査を指揮しています。ここに至るまでにはさまざまな出会い、タイミング、時代背景の影響がありました。私が西アジアで発掘調査に参加したのは 1994 年です。大学院の博士課程に入ってからでした。しかし、発掘調査は、大学1年生(1987年)より参加していました。西アジアに渡航する以前、日本各地で旧石器時代から江戸時代にかけての考古学調査に参加した経験が大きな財産となりました。また西アジアにおいてもシリアを皮切りにトルコ、エジプト、イラン、アフガニスタン、パレスチナ自治区、レバノン、そしてイラクと各地の調査に参加しながら研究を進めてきました。そこから得られた研究成果についてもいくつか紹介したいと思います。

6. 最後に

現在の西アジアの社会情勢は決して楽観できるものではありません。また昨年まではコロナ禍により渡航さえも難しい状況にありました。それにもかかわらず現地でのフィールド調査が継続できているのは、サポートしてくれている現地や日本の方々のおかげだと感じています。またこれまでの先人たちが築き上げてきた基盤の上に立っていることはいうまでもありません。考古学調査は、一人ではできません。さまざまな苦労もありますが、その分魅力も大きいのです。それをみなさんに少しでもお伝えできればと思います。



図1:現在調査中のイラク共和国クルディスタン地域スレマーニーヤ県最大級の都市遺跡ヤシン・テペ(2022年夏)。

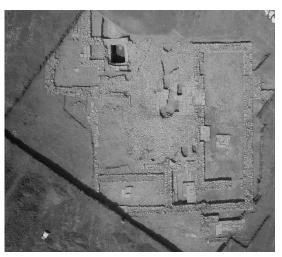


図2:ヤシン・テペ遺跡の「下の町」で 出土した鉄器時代(前8~7世紀)の大 型邸宅:新アッシリア帝国の文化的影響 を強く残す建造物で、帝国の辺境部で発 見された貴重な事例です(2017年夏)。



図3:ヤシン・テペ遺跡での調査終了時の集合写真(2017年夏):歴史時代の発掘調査は多くの人員を必要とし、そのマネージメントも大切になります。ちなみにこれは調査参加者全員ではありません。



図4:私が西アジアで最初に経験した発掘調査:テル・マストゥーマ遺跡(シリア)の調査風景。

日本調査団によるイスラエル遺跡調査

月本昭男 古代オリエント博物館

1. テル・ゼロール

日本の調査団によるイスラエルの遺跡発掘調査は 1964 年にはじまった。「西アジア文化遺跡発掘調査団」が日本オリエント学会内に設けられ、1964 年から 1966 年まで、三次にわたるイスラエル、テル・ゼロールの発掘調査に派遣されたのである。団長は、当時の日本オリエント学会常務理事で、古代イスラエル宗教史を専門とした大畠清氏(東京大学文学部教授、当時)であった。1974 年、同じく大畠清氏を団長とする第四次発掘調査が実施されたが、石油危機とも重なり、それ以降、調査は継続されなかった。発表者が参加したのは、この第四次調査である。

テル・ゼロールは、旧約聖書が「シャロンの野」と呼ぶイスラエルの海岸平野北部に位置する遺跡である。遺跡は二つのアクロポリス(「北のテル」と「南のテル」と呼ばれた)によって構成され、中期青銅器時代からローマ時代までの時代層が確認されている。第二、第三次調査「南のテル」の西 150m ほどの平地に設けられた墓地の発掘も実施された。

これら三次にわたる発掘調査の成果は、大畠清編『テル・ゼロール/Tel Zeror I』(1966)、『同 III』(1967)『同 III』(1970)として、日本語と英語による報告書が天理時報社から刊行された (第四次調査の報告は未刊行)。

出土遺物は多岐にわたるが、当時のイスラエルは、外国調査団による発掘により、同一タイプの遺物が複数出土した場合、その一部を本国での研究資料として調査団に寄贈しており、テル・ゼロールの出土遺物の一部も、調査団に寄贈された。それらはながらく日本オリエント学会が保管していたが、その後、天理大学付属天理参考館に寄贈された。

テル・ゼロール発掘調査で明らかにされた遺構と出土遺物は少なくないが、ここでは墓地の紹介にとどめたい。墓の形態は土壙墓(36 基)、甕棺墓(77 基)、主に平石を埋め込んだ石棺墓(cist grave,9 基)、それに石囲墓(1 基)と多様性に富むが、いずれも個人墓である。副葬品として添えられた土器の分析から、おおまかに、土壙墓は後期青銅器時代末期から鉄器時代初期、石棺墓は初期鉄器時代に年代づけられた。甕棺墓は甕のサイズおよび僅かに残る人骨から小児用であった。このように異なる形態の墓が同一墓地にみられること自体、珍しい現象であり、南レヴァント海岸平野部の埋葬法を示す重要な事例を提供することになった("Grab" in K. Galling, hrsg., Biblisches Reallexikon, neu Aufl., Tübingen 1977)。パレスティナの丘陵地から山地を拠点としたイスラエルの民の家族墓とは対照的であった。

パレスティナは、地理的にはアフリカ大陸とユーラシア大陸を結ぶ陸橋であり、前 3000 年以降はエジプトとシリア・メソポタミアを結ぶ街道に面し、時代をとおして種々の民族が 居住を繰り返した地域である。したがって、後期青銅器時代から初期鉄器時代のテル・ゼロ ール居住者の民族的帰属は自明ではなかったが、石棺墓に添えられた副葬品として発見された把手付獅子頭角杯土器(rhyton)が、後に、「海の民」のそれと同系統の作例であることが明らかになった(T. Dothan, Philistines and Their Material Culture, Yale Univ. Press, 1982, pls. 13-15)。パレスティナ海岸平野の南部に定住した「海の民」の一派ペリシテ人の物質文化はテル・ミクネーほかの発掘調査によって明らかにされたが、彼らの影響は同じ海岸平野の北部にまで及んでいたのである。

2. エン・ゲヴ

テル・ゼロールに次ぐ日本調査団の発掘調査地はガリラヤ湖東岸の遺跡エン・ゲヴであった。テル・ゼロール発掘調査にイスラエル側スタッフとして参加された M・コハヴィ (Kochavi) 氏 (テル・アヴィヴ大学教授、当時) は、1987 年、イスラエルの占領地であるゴラン高原周辺の遺跡調査を計画し (Geshur Project)、その一環として日本の調査団に呼びかけてこられた。占領地が返還されると、考古学的調査は不可能になる、と考えての計画であった。日本では、テル・ゼロール発掘調査に参加された金関恕、小川英雄両氏に発表者も加わって相談し、いったん、コハヴィ氏の申し出を断った。道義上、占領地域の調査には参加できない、と判断したのである。コハヴィ氏はそれを受け、国連で承認されたイスラエル領土内に位置するエン・ゲヴ (En Gev) 遺跡の調査を提案されたのである。

こうして、エン・ゲヴ遺跡の発掘調査は1990年に開始し、以後2004年まで、8次にわたって続けられた。1990-1992年度は金関恕天理大学教授(当時)が、1998-1999、2001、2003-2004年度は月本昭男(立教大学教授、当時)が団長をつとめた。遺跡は北の「上の町」と南の「下の町」から構成されているが、すでに1961年、B・マザールほかが短期間の発掘調査を実施し、前10世紀から前8世紀後半までの5層を確認していた。日本調査団は、マザールの調査が要塞(citadel)と呼び、西の囲壁部分をわずかに検証したに過ぎない「上の町」(アクロポリス)を調査対象にした。遺跡の「下の町」には、すでに、キブツ「エン・ゲヴ」の住民が住んでおり、本格的な発掘は不可能であった。

都合8次に及ぶ発掘調査で検出された主な遺構は、以下の4つの建造物である。

- ①「上の町」部分を囲む東側のケースメイト式城壁(casemate wall)とその北東の角に設けられた塔の基礎。
- ②ケースメイト式城壁に沿って建造された列柱式建造物。
- ③ヘレニズム期の複数層におよぶ居住層。
- ④ローマ時代の石灰窯二基。

壁を二重にし、その間にできる空間を隔壁で仕切るケースメイト式城壁(①) は、「上の町」の防御用であったと思われる。それは二重壁の間に投げ込まれた土器片の年代基づき、前9世紀に建造され、この町が放棄される前8世紀後半まで使われていたことが判明した。その城壁に沿って建造された列柱式建造物(②) は、ほぼ同じ場所に上下2棟が検出された。

下層のそれは前9世紀に建造され、上層のそれは前8世紀に建て替えられたのである。列柱式建造物は、通常、中央に通路が設けられ、その左右に柱が並び立ち、柱と左右の壁の間が石敷きの部屋なるような構造を示す(それゆえ"tripartite building"とも呼ぶ)。すでにメギドやハツォルといったイスラエルを代表する遺跡で検出され、イスラエルの考古学者Y・ヤディン(Yadin)はこれを「ソロモンの厩」と結びつけ、一般に知られるようになっていた。後に、ベエル・シェバ遺跡で列柱式建造物を検出した J・アハロニはこれを「貯蔵庫」と解釈した。以後、複数の遺跡で、同じ構造の建造物が発見され、これを「市場」とする見解なども提示されてきた。エン・ゲヴの列柱式建造物がどのような機能を果たしていたのか、最終的な結論には慎重でなければならないが、物品の集積地(entrepot)の可能性は考慮されていたろう(エン・ゲヴの場合、「厩」はほぼありえない)。

「上の町」の最上層には、「下の町」で確認されなかったヘレニズム期の複数層におよぶ居住層が検出された。その居住層を断ち切るようにして設けられたローマ時代の石灰窯 (lime kiln) は、拳ほどの大きさに砕いた石灰岩を焼いて消石灰にする施設である。エン・ゲヴで生産された消石灰は、おそらく、エン・ゲヴに近い山の上の町ヒッポスで用いられたのかもしれない。消石灰は、当時、防水用プラスターに用いられていた

エン・ゲヴ遺跡の調査報告は、月本昭男・長谷川修一・小野塚拓造編『エン・ゲヴ遺跡 発掘調査報告 1998~2004』(リトン、2009 年)、M. Kochavi / A. Tsukimoto, En Gev, in The New Sncyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land, Supplimentary Volume, 1724-1726 など。

なお、エン・ゲヴ遺跡の発掘調査は2004年に終了したが、その後、杉本智俊氏(慶應大学教授)を団長とする慶応大学調査団が2009~2011年に「上の町」の未発掘部分を発掘調査し、同定は難しいが、明らかに公共建造物の壁、下水施設、調理施設などを検出した(杉本智俊編『エン・ゲヴ遺跡2009年—2011年調査報告』、慶應義塾大学西アジア考古学調査報告1)。

3. テル・レヘシュ

エン・ゲヴ調査を終了した日本イスラエル考古学調査団は、2006 年、下ガリラヤの遺跡 テル・レヘシュの発掘調査を開始した。エン・ゲヴ同様、テル・レヘシュを紹介してくれた のは M・コハヴィ氏であった。じつは、1960 年代、「西アジア文化遺跡発掘調査団」による イスラエル遺跡調査の事前相談において、発掘調査対象として、テル・ゼロールに次ぐもう 一つの候補がテル・レヘシュであった。テル・レヘシュ発掘調査は、2006~2008 年は置田 雅昭氏(天理大学教授、当時)が、2009~2010 年は月本が団長をつとめた。その後、2013 年からは桑原久男氏(天理大学教授)が団長を引き継ぎ、長谷川修一氏(立教大学教授)が 副団長をつとめている。

テル・レヘシュは、岩丘地形の上に造営され、周囲の傾斜がきつい中規模の古代都市であ

る。北側と西側には下の町が設けられ、二段構えである。イスラエルのすべての遺跡と同様、すでに土器片の表面採集によって、時代層は想定されていたが、初年度は、複数の試掘坑によって、中期青銅器時代から頂部のローマ時代までの居住が確認された。ヘレニズム時代層だけは、確認できなかった。

テル・レヘシュは、すでに J・アハロニによって、旧約聖書ヨシュア記 19:19 にイッサカル部族所属の町とされるアナハラトと同定されていた(J. Aharoni, JNES 26[1967], 212-215)。アナハラトはファラオ・トトモス III 世(前 15 世紀中葉)およびアメンヘテプ II 世(前 15 世紀末葉)が征服した町の一つに数えられていた。アマルナ書簡(前 14 世紀に西アジア諸国とエジプトとの交信を刻んだ楔形文字粘土書板)の胎土分析により、その 237~239 番の発信地はテル・レヘシュであったろう、とも推定されていた(Y. Goren et al., *Inscribed in Clay: Provenance Study of the Amarna Tablets and Other Ancient Near Eastern Texts*, Tel Aviv, 2004)。

これまでの発掘調査で、テル・レヘシュとアナハラトの同定を証明するまでにはいたっていないが、検出された注目すべき遺構は少なくない。その一つは、鉄器時代最初期のオリーブ圧搾施設である。全体で6基ほど検出されており、前1200年前後のテル・レヘシュがオリーブ油生産の中心地であったことを物語る。当時のオリーブ圧搾は、砕いて袋に詰めたオリーブの実を風呂桶状の石組に置き、その上に重石をおいて果汁を搾り出させる方式をとっていた。そして、石組の底に据えた石碗に集めた果汁を大鉢に移し、水分と油分を分離させたのである(小野塚拓造「油滴る地ー聖書時代のオリーブ生産」、上智大学キリスト教文化研究所編『聖書の世界を発掘する』リトン2015年、45-76頁)。

遺跡の頂上部からは、鉄器時代 III 期の大建造物が検出された。それは東西約 35m、南北 約 60m の方形を呈し、厚みが 1m をこえる囲壁を擁する建造物である。堅固な要塞であったろう。バビロニア時代もしくはペルシア時代の建造であるが、厳密な年代の確定とその機能、そして歴史的意味については、今後の研究に待たねばならない。

ローマ時代層からは、石灰石製の器の断片が数多く出土することもあり、当初から、この時代の住民が敬虔なユダヤ人であったことが想定された。はたして、2016 年にはシナゴーグと呼ばれるユダヤ教の会堂跡が検出され、2017 年度にその全貌が明らかになった。福音書に、イエスは「ガリラヤ中の会堂をめぐって宣教した」と伝えられるが、ガリラヤ地域における後1世紀の会堂跡は、それまで、2009 年にガリラヤ湖西岸のマグダラで発見された事例が唯一であった。したがって、テル・レヘシュは2番目の事例を提供することになった。この時代のテル・レヘシュには、「ファームハウス」(farmhouse)とそれに軒を接する居住がいくつか並ぶにすぎず、 村落とさえ呼びがたい小さな居住地であった。そこに設けられた会堂は、イエス時代のガリラヤのユダヤ人に関する貴重な資料を提供することになった。

レヘシュ出土の遺物の全貌は省略せざるをえないが、注目すべき遺物のひとつは、後期青銅器時代層から出土したミケーネ土器の小断片であった。その 2 点は戦車を描いた広口壺 (chariot krater) の、もう一点は鐙壺 (stirrup jar) の一部であることが明らかにされた(飯降美子「イスラエル、テル・レヘシュ遺跡出土のミケーネ土器」『天理参考館報』24号、2011

年、39-52 頁)。「下の町」で検出されたオリーブ圧搾施設とほぼ同時期の地層からは、焼成粘土製の仮面と祭儀台が、「下の町」から「上の町」に入る城門部分からはタンバリンを演奏する女性土偶が出土し、この時期のテル・レヘシュ居住者の宗教観念を垣間見せている。ローマ時代の遺物にはオリュントス式の碾臼も含まれる。出土した獣骨も興味深い事実を示しているが、ここでは、最後に、熊の指骨が検出されたことを指摘するにとどめよう。テル・レヘシュ発掘調査は、今後も継続され、発掘調査の中間報告書は準備中である。発表された予備的報告には、Y.Paz - M. Okita - A. Tsukimoto - Others, Excavations at Tel Rechesh, IEJ 60 (2010), 22-40; M. Aviam - H. Kuwabara - S. Hasegawa - Y. Paza, A 1st-2nd Century CE Assembly Room (Synagogue?) in a Jewish Estate at Tel Rechesh, Kower Galilee, Tel Aviv 46 (2019), 128-142 などがある。









左上: テル・レヘシュで発見された会堂(シナゴーグ)跡、後1世紀。

右上:テル・レヘシュ「下の町」から出土した焼成粘土製仮面、前1200年頃。

左下:テル・レヘシュのオリーブ圧搾施設、前1200年頃。

右下:生前のM・コハヴィ教授(1928-2008)と金関恕教授(1927-2018)。

トップランナーズ&パイオニアセミナー

公開セミナー実行委員会

委員長:門脇誠二 委員:齋藤正憲

田尾誠敏 高橋寿光 高見 妙 津村眞輝子 前田 修 三木健裕

本セミナーは、JSPS 科研費 22HP0003 の交付を受けたものです。

西アジア考古学最前線 トップランナーズ&パイオニアセミナー

2022年11月12日発行

編集:日本西アジア考古学会 公開セミナー実行委員会

発行:日本西アジア考古学会

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学人文社会歴史·人類学専攻

E-mail: office@jswaa.org U R L: http://jswaa.org/

